

中1ギャップ

2022.6.29

昨年の11月5日に、野田小学校の6年生が、野田中学校に「中学校見学」ということでやってきた。これは、例年行われていることである。自分たちが入学する中学校を前もって見ておこうというものである。

何事にも、「校長先生の話」はつきものである。今度、中学校に入ってくる子どもたちは、どんな様子なのかなと、体育館で120人を前に授業をした。そううまくはいかないと思っていたが、予想通りうまくはいかなかった。

野田小学校には、何度かお邪魔して、6年生4クラスの授業は見ている。このときは、体育館で国語の授業として詩を提示した。子どもたちの想像力を見たかったのだが、教室で考えを発表するのはだいぶ状況が違う。設定に無理があった。

授業後にいくつか質問をした。「中学校は、どんなところだと思いますか」と聞くと、「こわいところ」と返ってきた。きっと期待よりも不安のほうが大きいのだろう。楽しみではある反面、こわさもあるのだろう。

「中1ギャップ」という言葉がある。小学校を卒業して中学校へ進学した際、これまでの小学校生活とは異なる新しい環境や生活スタイルになじめず、不登校などになってしまうことである。この言葉は、小6から中1でいじめや不登校の数が急増するよう見えることから使われ始めた。今では、小中学校間の接続の問題全般に用いられている。しかし、明確な定義はない。

ギャップとは、大きなずれや隔たり、落差のことである。小学校と中学校と、ある程度のギャップはあってもよいと思う。そこに順応できる、適応できることが大切であり、それが成長となる。同じように、中学校と高等学校にもギャップはあるだろう。もっとギャップを感じるのは、社会に出るときではなかろうか。リアリティショックという言葉もある。新入社員が入社前後に感じるギャップのことである。

とはいえ、不安を抱きながらも期待に胸を膨らませて中学校に入学したにもかかわらず、不登校になってしまっただけではいけない。先生に生徒が合わせるのではなく、生徒に先生の方が合わせる感覚がないと難しいのかもしれない。小学校の先生のようにする必要はないが、言葉かけなど、その生徒に合わせて気を配る必要がある。その生徒が、中学校に慣れ、新しい生活が軌道に乗るまでは気を抜いてはいけない。

中1ギャップのような言葉は、安易に使うべきではない。何でもが中1ギャップというわけではない。10人の生徒がいれば、10通りである。すべて違う。一人一人の生徒のことを思い、常に寄り添う姿勢が最も重要である。